

特別展「東南アジアの陶磁」によせて

安南トンボと紅安南 —安南の名碗—

安南のお茶碗といえば、茶陶に親しんでおられる方ならず、その何点かを思い浮かべていただけるはず。茶人に「安南絞り手」、又は「安南トンボ手」、そして「紅安南」などと呼ばれているものがそれです。

安南トンボ手は絞り手の代表格ですが、その本歌とされるものが根津美術館所蔵の茶碗（カット1）で、これと並んで有名なのが徳川黎明会所蔵のもの（カット2）です。この蜻蛉手は現在でも写しがよく作られているほど日本人には馴染み深いのですが、その遺品となると極めて数が少なく、私は寡聞にして、上記の2点以外では京都の北村美術館所蔵のもの一点だけしか知りません。

一方、紅安南は徳川黎明会所蔵の茶碗（カット3）、それに個人所蔵の一碗（カット4）が特に有名で、この二点に次ぐのが東京国立博物館所蔵の重美の作品となるのでしょうか、紅安南も蜻蛉手と同じく遺例は稀少です。これらの作品について各々解説させていただく前に、安南のやきものあらましを簡単に御話することに致します。

あらためて申し上げるまでもありませんが、安南は領土の北辺を中国と接しています。従って安南は古代から政治・経済・文化など、あらゆる面で中国と密接な関係を持ち続けています。この関係は東

アジアに於ける中国と朝鮮とのそれによく似ているといえます。従って、陶磁も朝鮮と同じく中国の強い影響を受けて、北部の清化（タノア）地方を中心に、早くから発達していたようです。

作品は、漢六朝風のもの、唐宋風のもの、明清風のものなどが、中国本土の作風の変遷に従って種々作られました。その中でも逸品から見れば、宋風の白磁・青磁・鉄絵・明清風の染付・赤絵等が主ですが、それだけではなく勿論独自の意匠・技巧によるものも見られます。これらの作品の内、我が国においては染付が最もよく知られており、「安南染付」、又は「安南呉須」の名で呼ばれてきました。安南染付は元末明初の中国染付の影響下で、黎王朝時代、14世紀に主としてハノイ付近のバッチャン窯で、赤絵・白磁などと共に焼造され初めたと考えられています。染付の初期のものには中国製と見紛う程に精緻な作行を誇るものもあり、その重要な作例として有名なものに、15世紀中葉、黎王朝太和8年（1450）の年紀のある染付牡丹唐草文大瓶が、トルコのイスタンブールのトプカプ・カライ博物館に所蔵されています。

しかし、安南の染付の大部分は釉は黄ばみ、呉須は黒ずみ、文様は簡略化されて、しかもその模様が釉下で流れ、にじんでいます。これは釉に灰分が多いために呉須

が釉と共に流れた結果、こうなるのです。それは丁度絞り染の模様のように見えるところから、絞り手という名称が生まれたようです。絞り手の名は近衛予楽院（1667～1736）の『槐記』の中にも、南京染付について見えており、古くから用いられていたようです。

カット1の根津美術館の絞り手茶碗は、上から見ますとほぼ三角形で、高台が大きく、いかにも安南の特色をよく示しています。蜻蛉の絵付も茶趣に富み、絞り手の代表たる風格を十分に備えています。この茶碗は藤田家伝来で、往年の売り立てでは大変な高値で落札されて根津家に納まり、世を驚かせたものです。

カット2の徳川黎明会の絞り手茶碗は、作りは半筒状で、上でいくぶん開き気味です。大きさも並はずれで、安定感があり、姿は直線的で男性的な雰囲気をもっています。側面にはトンボを大きく、あるいは小さく自由に配し、内面は見込み中央に秋草風の簡単な文様を描いています。もと岡谷家の蔵で、二十日月の銘がついていますが、この銘のいわれは明らかではありません。

次は紅安南ですが、安南の赤絵はかなりの種類がありまして、その作品も染付と同じく、明時代初期から明末清初までと、かなり長期間にわたっているようです。紅安南の茶碗は作風から恐らく16・

7世紀に作られており、それが桃山から江戸初期にかけての頃に日本に運ばれたようです。製作地も明らかでなく、多分染付と同じくハノイ附近、あるいは北部地方の窯と推測されています。

カット3の徳川黎明会のもは、紅安南茶碗中、最も著名で、言うまでもなく尾州徳川家伝来です。作りはゆったりと丁寧で、ろくろ目も消されており、土はかなり白いものです。模様は淡い呉須で唐草や唐花、紋様帯の区画線を描きその上から長石分の多い水釉をかけて本焼きしてあります。やや白濁気味の釉膚には一面に貫入が走っていますが、そこに赤と緑の二色で絵付が施されています。黄ばんだ膚に浮かぶ染付・色絵の調子は下手っぽい感じですが、それがかえって親しみやすい暖かさとなって、時の茶人達に愛されたものと思われまふ。

カット4の紅安南茶碗はやや厚手の作りで、わずかに端反りになっています。張りのあるふくらみをもつ胴部には赤と緑の上絵具で奇抜な模様が描かれており、特にその意匠は筆太で塗られたあざやかな緑色と対照して、すこぶる印象的です。

これらの安南の名碗がこのたび当館で一堂に会します。この好機を大勢の方々に御楽しみいただければ幸いです。

（吉田宏志）

1 染付蜻蛉文茶碗 根津美術館蔵



2 染付蜻蛉文茶碗 徳川黎明会蔵



3 紅安南茶碗 徳川黎明会蔵



4 紅安南茶碗 個人蔵

